

αMプロジェクト2023-2024

開発の再開

Redevelopment of Development

vol. 5 奥村雄樹 | 我を忘れる身構えの手解きの跡形(我々は数多の知る由もない先行きの面影に湧き立つ)

vol. 5 Yuki Okumura: Aftermath of Hands-on Sessions on Various Nonactive Postures to Keep Oneself Somehow Carried Away (We Stand So Many Ghosts of Unknown Chances)

ゲストキュレーター: 石川卓磨(美術家・美術批評)

Guest Curator: Takuma Ishikawa (Artist, Art Critic)

2024年4月13日(土)~6月15日(土)

12:30~19:00 日月祝休 入場無料

レセプション: 4月13日(土) 18:30~

※「我々は数多の知る由もない先行きの面影に湧き立つ」出展者は4月初旬にWebページに掲載予定です。



武蔵野美術大学 鷹の台キャンパスにて(2024年3月 | 撮影: 神祥子)

会場:

gallery αM

〒162-0843

東京都新宿区市谷田町1-4

武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

<https://gallery-alpha.com>

協力:

平和紙業株式会社

株式会社竹尾

MISAKO & ROSEN

「知る由もない先行き」に先行して考えることの遂行性について

次の奥村雄樹の展覧会はどんなものになるだろう。正直に告白すれば、「我を忘れる身構えの手解きの跡形(我々は数多の知る由もない先行きの面影に湧き立つ)」という魅力的な展覧会タイトルが示すように、「数多の知る由もない先行き」を、私我先取りすることはできそうにない。

本展覧会では、いわば「キュレーション内キュレーション」として、個展の枠内でグループ展が開催される。参加するアーティストは、公募で集まった武蔵野美術大学の学生たち。彼らは、奥村によるレクチャーや「宿題・課題」に取り組んだ後、gallery αM で展示を行う。この展示には奥村自身もアーティストとして参加する。これはつまり展覧会という枠組みを超えて、教育的プログラムを開発するという、開発の多元性を開発する態度であり、それが奥村の開発の再開発だと言えそうだ。

奥村は、コンセプチュアル・アートにおける『『芸術家の脱人物化』によって『世界の自己表現』をもたらす特異な『遂行性』* に一貫して関心を持ってきた。これは、コンセプチュアル・アートが属人的な技術を外して制作を構築する条件に由来している。この機械的あるいは匿名的な性格から生まれる帰結の展開として奥村の思弁的探究がある。例えば、先駆的なアーティストとして現代美術史で欠かすことのできない存在になりながら、匿名的な活動を貫いた河原温や、作家の媒介的・補助的な職能を持つ通訳やアシスタントにフォーカスすること。そのような人物を作品の対象として選び、一人のアーティストに帰属するはずの作品や発言に、複数の「制作者」の存在を浮かびあがらせる、あるいは主体の入れ替えをもたらす操作を行っている。

再び展覧会タイトルに目を向けてみよう。この謎めいたタイトルを奥村のコンセプチュアル・アートに対する理解と重ねると、パラフレーズの類似を確認できる。「我を忘れる身構え」を「芸術家の脱人物化」として理解すれば、「手解きの跡形」とは「世界の自己表現」にあたる。そして出展者の作品＝「遂行性」を通して「世界の自己表現」を感じられるのだろうか。しかしそれでは「我を忘れる身構え」という前提と矛盾するだろう。つまりこの解釈では奥村の企みを単純化してしまう。結局「数多の知る由もない先行き」を先取りしようとするのは不可能だ。だから私は、キュレーターとしての不安や先入観を捨てて(我を忘れて)、一観客として何が起るのかを素直に楽しみにする身構えを会得するという結論に至った。

* 奥村雄樹「コンセプチュアル・アートの遂行性——芸術物体の脱物質化から芸術家の脱人物化へ」<https://www.artresearchonline.com/issue-2a>、2024年3月10日アクセス

石川卓磨

我々は数多の知る由もない先行きの面影に湧き立つ

「僕はこのワークショップを制作に行き詰まり展覧会に気後れし自分の無能さに落ち込みがちな人（僕自身を含む）が些細な行為も制作的（詩作的）になりえるしホワイトキューブは人が生を送る部屋の一様式にすぎないし才能はむしろ阻害的である——世界はずでに豊穡でどんな瞬間も奇跡なので作り手は作為を捨てて所与の状況とただ戯れればよい——ことを理屈ではなく身を以て習得できる場にしたい。そのために1950年代から70年代にかけてコンセプチュアル・アートをはじめ実験音楽やフルクサスやポストモダン・ダンスなど諸分野で培われた真に語義的な意味で「パフォーマンス」な手法——特別な技術や感性を持たず専門的な訓練も受けていない者が簡潔なルールの束に黙々と従いながら特定の作業をやり抜くこと——に孕まれた可能性を歴史的な既存作の再演および各自の新作の試行を通じて掘り起こし突き詰めていく。上記の傾向に該当しなくても単にコンセプチュアル・アートやパフォーマンスに興味がある人も歓迎。

個人的な動機はふたつ。まず僕が近年アントワープ（ベルギー）のアカデミーや京都の美術大学で練り上げてきたカリキュラムが武蔵野美術大学の学生の皆さんの実践にどのように作用するのか見てみたい。そしてまた僕に展覧会の場として与えられたホワイトキューブ（gallery αM）が世界から切り離された特区ではなく世界の開かれた一部であることを露見させるにあたって僕ひとりでは角度が限られるので多くの人に取り組んでもらいたい（各自がただ各自であるだけで視点と立脚点は複数化し場から導き出される行為は多様化するから）。つまりは皆さんの力を貸してほしい。お願いします。」*

* 武蔵野美術大学在籍者を対象とする春休み特別ワークショップ 2024「コンセプチュアル/パフォーマンス——我を忘れる身構えの体得へ」募集要項より転載

奥村雄樹

●奥村雄樹(おくむら・ゆうき)

1978年青森県生まれ。主な個展に「彼方の男、儂い資料体」慶應義塾大学アート・センター（東京、2019）、「29,771 days -2,094,943 steps」LA MAISON DE RENDEZ-VOUS（ブリュッセル、2019）など。主な二人展に「奥村雄樹による高橋尚愛」銀座メゾンエルメス フォーラム（東京、2016）など。主なグループ展に「あいち2022」愛知芸術文化センター（2022）、「July, August, September」St. Apernstrasse 13（ケルン、2021）、「Un-Scene III」WIELS（ブリュッセル、2015）、「MOTアニュアル2012 風が吹けば桶屋が儲かる」東京都現代美術館（2012）など。ウィーンのSecession で2025年2月に過去最大規模の個展が予定されている。



《(ほぼほぼ)誰にでもバックストーリーがある》
2023年 | インストラクション | 規模不定
京都芸術大学大学院グローバル・ゼミ・スタジオ(U21)での実行風景 撮影:奥村雄樹



《英国には地点が107と交点が888》
2024年 | 場に現存する素材で構築された絵画 | 83.5×51cm
20 Albert Road (グラスゴー)での設置風景
撮影:Patrick Jameson
提供:Centio
厚意:MISAKO & ROSEN



《Casino Eefrew》
2024年 | 名刺 | 5.5×8.5cm
Etablissement d'en face (ブリュッセル)での設置風景
撮影:奥村雄樹
協力:Provence
厚意:MISAKO & ROSEN

開発の再開

現代は、気候変動、感染症、戦争、自然災害、テクノロジーなどによって、永続すると信じられていた日常が大きく変動し、将来の予測が困難な激動の時代となりました。この時代の現象には、ネガティブなものばかりではなく、不平等、差別、暴力を強いてきた社会や構造に抗議し変化を与えていく社会運動も含まれています。ソーシャリー・エンゲイジド・アートやアクティビスト・アートなどは、社会に直接的に関わり、そのような時代に対応したアートだといえます。しかしそのようなアートと社会の関わり方を見ると、そこにはさまざまな障害、温度差、矛盾、認識不足が存在しています。そのため私は、社会に直接関与しようとするアートのアプローチに限定せず、造形的表現や美術史においても、この時代を乗り越えるための新しい認識や方法へのアップデートが重要だと考えています。

「開発の再開」というタイトルは、以上のような前提に向けられています。そして、開発であれ、再開開発であれ、そこではなにかしらの「新しさ」が関わることを意味しています。

しかし、哲学者・美術批評家であるボリス・グロイスが指摘するように、この数十年間アートで「新しいことをするのは不可能である」という言説や認識が広く影響力をもってきました。「アートの終焉」(アーサー・C・ダントー)の言説は、この影響の歴史的な起点になっています。ここでの「終焉」とは、アートという営為自体の終焉を示しているのではなく、「アートの終焉」以後のアートが存続していくことを前提にしています。つまりアートは終わったままこれからもずっと続いていく。そのため「新しいことをするのは不可能である」という悲観的表明は、美術史の重荷や緊張関係から解放されて、アーティストが個々人の表現活動を自由に展開できればよいという楽天的な気分を含んでいます。

では、この激動の時代において、アートは、「新しさの終わり」や「アートの終焉」に留まり続けていていいのでしょうか。冷戦体制崩壊後の時代を象徴する「歴史の終わり」(フランシス・フクヤマ)という歴史認識に、批判的な検討の必要性があるとされているように、「新しさの終わり」という認識から批判的に脱却する必要があるのではないのでしょうか。

ただし、これまでのトレンドと差異をつくり出すような新卒のトレンドを提示したいわけではありません。なぜならそれは結局トレンドの構造を何も変えることがないからです。むしろ私たちは、これまであまりにも一方向的(過去→現在)な「新しさ」を信じ、限定的な価値基準で「新しさ」を認めてきたのではないのでしょうか(アートの新しさとは、作品の様式や美術館の内部だけにあるものなのか)。

「開発の再開」とは、「新しさ」をつくり出す開発という概念自体を、批判的に再開する試みです。また、開発は結果ではなく過程であり、実験、研究、調査という行為が不可欠です。再開は、開発がもつ拡大・拡張の一方向的なベクトルとは異なる時間的・空間的な展開を意味します。本展覧会シリーズの8組のアーティストやコレクティブには、テーマや表現形式に共通性がないとしても、それぞれが歴史や方法に関わる研究・実験的活動やコンセプトをもっています。それを駆動しているのは必ずしも作品や展覧会に成果が集約されないモチベーションかもしれません。展覧会や作品は、結果としてわかりやすく「新しさ」を示さないかもしれません。しかし、この投げかけによって「開発の再開」とは何かを考える契機が鑑賞者にも生まれるのではないかと考えています。

石川卓磨 (美術家・美術批評)

●石川卓磨 (いしかわ・たくま)

1979年千葉県生まれ。美術家・美術批評家。芸術・文化の批評、教育、製作などを行う研究組織「蜘蛛と筈」を主宰。近年の主な論考に「パーティーの後で」『中崎透 フィクション・トラベラー』図録(水戸芸術館現代美術センター、2022)、「寄生し、介入する 旅するリサーチ・ラボラトリー評」『丸亀での現在』図録(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2022)、「アフリカ系アメリカ人として生きる「怯え」と文化的混血性。ラシード・ジョンソン「Plateaus」レビュー」(Tokyo Art Beat、2022)、「特権的な眠り——福永大介「はたらきびと」展」『月刊アートコレクターズ2021年1月号』(生活の友社、2021)など。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム

e-mail: alphas@musabi.ac.jp / tel:03-5829-9109 / fax:03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 連携共創チーム(ギャラリー不在時)

tel:042-342-7945 / fax:042-342-6087